

ついに私も今年で五〇歳になる。日本人男性の平均寿命が五〇歳を超えたのは、戦後直後の一九四七年のことである。なので、戦前・戦中であればそろそろ遺書を書く年齢ということになる。

ああいやだ、勘弁してくれとわめいてみても、鏡に映った自分の顔には年齢相応のシミが浮き上がっている。私と同年で最高の有名人といったら、アメリカのオバマ大統領である。日本の政治家では、小泉郵政選挙で刺客候補として一躍名を馳せた佐藤ゆかり参院議員らがいる。芸能界では松田聖子が一九六二年三月生まれなので、同学年である。

松田聖子といえば、売り出したばかりの彼女を私は和泉校舎で目撃している。一九八〇年六月の和泉祭に彼女は出演していた。いまは「創造の泉」というしやれた名前がついている噴水の奥に特設ステージが設けられ、そこで彼女が熱唱したのだった。当時は六月末に和泉校舎で和泉祭が、一月一日の創立記念祝日をはさんで駿河台校舎で駿台祭が開かれていた。諸般の事情から、現在は両者が統合され、かつての駿台祭の期間に和泉校舎で明大祭として大学祭が開催されている。

屋外の特設ステージであるから、入場無料である。一年生だった私は所属していたサークルの模擬店準備をさぼって冷やかしにいった。明大はこの年の東京六大学野球春季リーグ戦に優勝している。スタッフからいわされたのだろう、聖子は開口一番「東京六大学野球優勝おめでとございます」とあいさつした。そして、梅雨の曇り空を背景に、紙テープの代わりにトレットペーパーが飛んでいたのが、妙に記憶に残っている。聖子は「青い珊瑚礁」を唄ったような気がする。しかし、今回調べてみたらそれがリリースされたのは同年七月であった。「裸足の季節」だったかもしれない。ちなみに、聖子のナンバーでの一番の名曲は「瞳はダイヤモンド」（一九八三年一〇月リリース）だと思う。「映画色の街」という唄いだしが切ないくらい好きだ。

この和泉祭には、「木綿のハンカチーフ」などのヒット曲をもつ太田裕美も出演している。第二校舎の一番教室か二番教室がステージになっていたはずだ。高校の頃から私は彼女の大ファンで、このコンサートを楽しみにしていた。いまでも、私がついている数少ない音楽CDの大部分は彼女のものである。

「木綿のハンカチーフ」は、当初収録されていたアルバム（「心が風邪を引いた日」）ヴァージョンでは三番が「恋人よ君は素顔で」となっている。だが、それがシングルカットされたヴァージョンでは「恋人よいまも素顔で」と歌詞の一部が変更されている。これに気づいた人はそうはいないだろうと悦に入っていたが、ウィキペディアをみるときちんと

書かれていて、ちよつと悔しい。

その前日に、和泉校舎横の通称くじら公園（当時はこんな名称はなかった）でサークルの前夜祭があり、先輩たちに勧められるままに日本酒をがぶ飲みしてしまった。案の定、翌日はひどい二日酔いでコンサートどころではない。これは私の人生で最大の痛恨事となっている。

そういえば、この日サークルの模擬店のシフトも私は無断ですっぽかしてしまった。気後れして、責任者だった先輩に謝れないままだった。その先輩はもうこの世にいない。一九八三年一月二日に静岡県掛川市のレクリエーション施設で発生したガス爆発事故（つま恋ガス爆発事故；死者一四名）の犠牲となったのだ。彼女に謝れなかったことも、強い後悔として私の心にいまも突き刺さっている。

あの和泉祭の少し前の五月一六日には、大平内閣に対する内閣不信任案が可決され、大平首相は解散総選挙に打って出る。世にいう「ハプニング解散」である。野党第一党の社会党が否決されることを承知で、いわばスタンドプレーとして提出した不信任案が、自民党議員の大量欠席によってよもや可決してしまったのだ。前年のいわゆる四〇日抗争（注）で敗れた三木派や福田派など反主流派が、意趣返ししたわけである。

当時首相秘書官であった大平の娘婿の森田一は、次のように述べている。

「あのとき、私も本会議場にいたのですけれども、なかなか自民党の議員が入ってこなくて、社会党の理事が自民党の理事に「お前のところは何をしているのだ、このままだと不信任案が可決されてしまうじゃないか」「大変なことになるぞ」「早く自民党議員を全員呼べ」と、ギャンギャン言っていましたよ。」（森田一「二〇一〇」『心の一燈』第一法規、二一〇頁）

否決されると高をくくって出した社会党があわてふためいているのが、おかしい。解散されたらいちばん困るのが実は社会党だった。それも後の祭りで、不信任案を可決された大平は解散総選挙を決意する。ちょうど六月には参院通常選挙も控えていたことから、日本の政治は史上初の衆参同日選挙へとなだれこんでいく。その選挙運動期間中の六月一二日に、あるうことか大平が心筋梗塞で急死するのである。その同情を追い風にして自民党は同日選に圧勝する。前述の森田も大平に代わって急遽立候補し、当選している。

それまでの党内抗争がうそのように、主流・反主流の両派は「弔い合戦」を合い言葉に団結し、みな喪章を付けて残りの選挙戦を戦った。そして、大平をあしざまに批判していた同じ政治家が、選挙事務所に大平の遺影を掲げぬけぬけと議員バッジを手にしていく。政治家は当選のためならなんでも利用する、そのリアリズムを肌で感じた瞬間だった。

あれから三〇年が過ぎたが、この思いは強まりこそすれ、弱まることはない。

こんな思い出話しか書けないとは、おれもトシをとったなあ。

二〇一一年二月六日・山中湖でのゼミ合宿から戻った日に。

(注) 四〇日抗争とは、一九七九年の総選挙で自民党が過半数を下回る議席しか獲得できなかったことを発端とする、主流・反主流両派の党内抗争をいう。総理総裁の大平は最大派閥の田中派の支援を後ろ盾に留任を表明する一方、反主流派は大平の引責辞任を強く要求した。その上、反主流派は福田赳夫を首相候補に「自民党をよくする会」という党内党を結成するまでに至り、両派の対立は修復不可能な段階にまで達する。

懸命の調整工作にもかかわらず、自民党は首相候補を一本化できないまま首相指名選挙に臨むことを余儀なくされた。衆院では大平と福田がそれぞれ一位、二位の票を獲得したが、一位の大平の票も過半数には及ばなかった。そこで自民党の候補者同士で決選投票が行われるという異例の事態を迎える。結局、大平が福田を振り切り、大平が第六九代首相に就任する。ちなみに、参院では大平と社会党委員長の飛鳥田一雄の決選投票となり、大平が当選した(福田は第一回投票で三位)。

この間、約四〇日を要した。しかし、反主流派にはおおきなしこりが残り、これが翌年のハプニング解散の伏線となる。